

## Sherwood Anderson の文体についての考察

文学部英語・英米文学科教授

佐藤 和博  
Kazuhiro Sato

はじめに

### I. 文頭の処理にみられるリズムの変化

- a. 短編 “Death in the Woods” における例
- b. 短編集 *Death in the Woods* の中の、その他の短編における例
- c. *Winesburg, Ohio* における例

### II. 単語の使い方によるリズムの変化

- a. 短編 “Death in the Woods” における例
- b. 短編集 *Death in the Woods* の中の、その他の短編における例
- c. *Winesburg, Ohio* における例

### III. 長いセンテンスと短いセンテンスの組み合わせによるリズムの変化

- a. 短編 “Death in the Woods” における例
- b. 短編集 *Death in the Woods* の中の、その他の短編における例
- c. *Winesburg, Ohio* における例

おわりに

引用文献

はじめに

Anderson の文体について考える時、その方向性については、金関寿男が、「現代アメリカ散文スタイルについての一考察」という論文の中で、早くも1962年の論文のなかで示しているように思われる。この論文の中で、金関は、ガートルード・スタインからシャーウッド・アンダソン、そしてアーネスト・ヘミングウェイに至る現代アメリカの散文スタイルの「発生と展開」について論じる。「平明で、モノシラビックな言葉からなる単文を、つぎつぎと積み重ねてゆく手法は原則的にこの三人の作家に共通している」(130 [457])として、Anderson について次のように書いている。「シャーウッド・アンダソンは、ときとしてヘミングウェイよりさらに staccato な文章を書く。たとえば次の引用は、アンダソンによる農業共進会場のスケッチである」(130 [457])として具体的に作品からの引用を示しながら、次のように、結論付ける。「きわめて単純だが、非常に洗

練された現代の散文スタイルを作り上げた。」(130 [457])

Anderson の *Winesburg, Ohio* の文体について、西田実も、『アメリカ文学史』のなかで、「マーク・トウェインに始まった口語体のアメリカ英語をさらに洗練させたもので、やがてヘミングウェイにひきつがれる」(69)と述べて、金関同様、高く評価している。

以上に述べられた、Anderson の「洗練」された文体とは、具体的に、どのようなところであろうか？例えば、彼の短編のなかで、代表的作品のひとつである “Death in the Woods” (「森の中の死」) の冒頭のいくつかのパラグラフを読んでみる。そこには、確かに、興味深い単語の使い方、センテンスの組み合わせによるリズムの変化の例が指摘できる。その変化が、彼の文章を一見単純なセンテンスの連続のように見えながら、決して単調には終わらないようにさせていると思われる。そのように変化をつけられるところが

Anderson の文体の洗練ということに繋がっているかもしれない。

この点に関して、短編集 *Death in the Woods and Other Stories* の“A Meeting South”の中で、Anderson が書いている次のセンテンスが興味深い。ニューオリンズを舞台に、語り手の「わたし」と David という人物との交流の中で、David が言う。“The little pain makes a kind of rhythm for the great pain—like poetry.” (236 [274]) 詩をつくる時に、いかに「蚊によるささやかな苦痛」のようなリズムの変化を創り出すか、について Anderson は書いている。このことは、彼が小説を書いた時にも当てはまる言葉のように思われる。

この論文では、いかに Anderson は、パラグラフを構成する時に、ささやかな変化を創り出すことによって「洗練」されたパラグラフにしているか、具体的に例をあげながら論じていく。

扱う作品は主として、短編集 *Death in the Woods and Other Stories* (1933) であり、*Winesburg, Ohio* (1919) も視野に入れる。

## I. 文頭の処理にみられるリズムの変化

金関寿夫の言う「平明で、モノシラビックな言葉からなる単文を、つぎつぎと積み重ねてゆく手法」による Anderson の文体は、その一方で、その手法ゆえ単調なリズムになりやすい可能性も否定できない。1つのパラグラフの中で、同じような単文が連続し、結果として同じような平板なリズムに陥ってしまうこともあるだろう。従って、「大きな苦痛」が長く続くように思われる中に、いかに「ささやかな苦痛」としてのリズムの変化を作り出すか、について Anderson は腐心したように思われる。その例として“Death in the Woods” (1933) における次の例を挙げることができる。

### a. “Death in the Woods”(1933) における例

She was an old woman and lived on a farm near the town in which I lived. All country and small-town people have seen such old women, but no one knows much about them.

Such an old woman comes into town driving an old worn-out horse or she comes afoot carrying a basket. She may own a few hens and have eggs to sell. She brings them in a basket and takes them to a grocer. There she trades them in. She gets some salt pork and some beans. Then she gets a pound or two of sugar and some flour.

*The Complete Works of Sherwood Anderson*, vol. XI, “Death in the Woods”, (3[41])

この引用は、短編“Death in the Woods”の第1パラグラフ全体を示している。ここで、Anderson は各文の文頭をどのように書いているか、に注目してみる。まず5行目の“Such an old woman”を受けて、7行目に代名詞の“She”が文頭に登場する。それに続き、8行目文頭にも“She”が登場する。注目すべきは、9行目の文頭の処理である。Anderson は、9行目の文頭を“Then”で始めている点である。Anderson は文頭を“She”で始めているではない。“She”で始まる文頭を持つセンテンスが、3度連続するのを、回避しているかのようである。それは、11行目のセンテンスにも当てはまる。“Then”を文頭に置いて、“She”で始まる文頭を持つセンテンスが連続しないようにしている。このように文頭を変化させることによって、同一の文頭“She”が連続しないように書いている。このような手法に、Anderson の技巧の具体例を見ることができる。

### b. 短編集 *Death in the Woods*(1933) の中の、その他の短編における例

短編集 *Death in the Woods*(1933) の中の、その他の短編における例は、どの様なものが見つけられるだろうか。例えば、“The Lost Novel”の中に次のような短いパラグラフがある。

But here is a brief outline of his history. He came from a poor farming family in some English village. He was like all writers. From the very beginning he wanted to write.

## “The Lost Novel”, (84[122])

この引用中、最後のセンテンスは、文頭を “He” で始めても良さそうにも見えるが、“From the very beginning” から始めている。“He” で始まる文頭を持つセンテンスが、3度連続しないように配慮している。そのような変化によって、単純なリズムに陥りそうになることから免れている。

この様な例は、時間を遡って、Anderson の初期の作品にも見つけられるであろうか。例えば、Anderson の代表作 *Winesburg, Ohio*(1919) はどうであろう。

c. *Winesburg, Ohio* における例

*Winesburg, Ohio*(1919) においても同様の例を示すことができる。以下は、“Godliness” という短編に見られる例として、パラグラフの前半を示す。

But Louise could not be made happy. She flew into half insane fits of temper during which she was sometimes silent, sometimes noisy and quarrelsome. She swore and cried out in her anger. She got a knife from the kitchen and threatened her husband’s life. Once she deliberately set fire to the house, and often she hid herself away for days in her own room and would see no one....

*The Complete Works of Sherwood Anderson, vol. III, “Godliness”, (71)*

以上の引用の中で、Anderson は、“Louise” という人物を受けて、1行目に代名詞の “She” を文頭に置いたセンテンスを書く。それに引き続き、4行目と5行目に、“She” で始まるセンテンスが2度連続した後で、7行目に、主語は “she” であるにも係らず、Anderson は文頭を “Once” で始めている。このような文頭の処理によって、文頭 “She” が「単調」に連続するというリズムを小さく変化させている。

もう1つ別の例として、*Winesburg, Ohio* の中

の “Drink” という短編から示してみる。以下は、パラグラフの前半を示す。

Tom got drunk sitting on a bank of new grass beside the road about a mile of north of town. Before him was a white road and at his back an apple orchard in full bloom. He took a drink out of the bottle and then lay down on the grass. He thought of mornings in Winesburg and of how the stones in the graveled driveway by Banker White’s house were wet with dew and glistened in the morning light. He thought of the nights in the barn when it rained and he lay awake hearing the drumming of the rain drops and smelling the warm smell of horses and of hay. Then he thought of a storm that had gone roaring through Winesburg several days before and, his mind going back, he relived the night he had spent on the train with his grandmother when the two were coming from Cincinnati. Sharply he remembered how strange....

“Drink”, (263-64)

この引用例の中でも、平明でモノシラビックな単文が連続している。この中で、1行目の Tom を受けて、4行目に代名詞 “He” が登場する。これに引き続き6行目と10行目に、それぞれ、代名詞 “He” を文頭にしたセンテンスが置かれている。13行目に、主語は “he” であるが、しかし Anderson は文頭を “Then” で始めている。ここでも “He” で始まる文頭を持つセンテンスが4度連続しないように書いている。このような文頭の処理によって、ひとつのパラグラフの中で、単純になりそうなりズムは変化させられる。

結局、このような Anderson の文体上の技巧の例は、1919年に出版された *Winesburg, Ohio* にも見つけられるということが分かる。

以上見てきたように、Anderson が文頭を変化させることによって、単純な単文の連続になりそうなところで、単調さから免れるような技巧を見せていることが分かる。

## Ⅱ．単語の使い方によるリズムの変化

ここまで、Anderson が、パラグラフの中で、文頭の処理に関して、どのような技巧を示しているか、を見てきた。次に、単語の使い方によって、Anderson が、いかにリズムを変化させているかを示す。Anderson は、音節の短い単語と長い単語を組み合わせることによってもまた、文章のリズムを変化させ、単調で平板な流れを意識的に壊しているように思われる。以下、単語の使い方によるリズムの変化の例を具体的に示していく。

Anderson は、主にアングロ・サクソン語をベースとして「平明で、モノシラビックな言葉からなる単文」をつぎつぎ積み重ねていく手法により、作品を作り出しているように思われる。しかし、時に、多音節のラテン語由来の単語、同じく、多音節のギリシャ語由来の単語を配列して音の響きの変化をつけ、それによって、音節の長さによる、際立った効果をうみだしているように見える。

例えば、“Death in the Woods”冒頭には、以下のような例がある。以下は第4パラグラフの前半である。

### a.“Death in the Woods”(1933)における例

There was such an old woman who used to come into town past our house one Summer and Fall when I was a young boy and was sick with what was called inflammatory rheumatism. (4[42])

この引用の中で、注目すべきは、行末の“inflammatory rheumatism”という箇所である。“inflammatory”という語は、本来、ラテン語由来であり、5音節である。また、“rheumatism”という語は、本来、ギリシャ語由来であり3音節である。これら2つの語が、アングロ・サクソン語をベースにして「平明で、モノシラビックな言葉」の連続の中で、センテンスの最後の語句として配列されている。それによってアングロ・サクソン語ではない音の長さと音の響きの特異性は、際立っているように思われる。

この例に関連して、例えば、William L. Phillips は、“How Sherwood Anderson Wrote *Winesburg, Ohio*”という論文の中で、次のように指摘している。

Some of the stylistic traits that have been noticed in Anderson’s prose—colloquialisms, repetitive patterns, and frequent auctorial intrusions—can be seen to have arisen in the revisions. He can be seen changing a more formal, Latinate expression to a colloquial, Anglo-Saxon one.”(279)

この引用では、Anderson が、*Winesburg, Ohio* を書く際に、ラテン語由来の単語から、アングロ・サクソン語由来の単語へと書き換えをしたことが指摘されている。それほど、Anderson は、音節の長さや単語の由来から生じる音の響きの差異に敏感であったという証左であり、“Death in the Woods”に出て来る“inflammatory rheumatism”という表現による、ラテン語由来＋ギリシャ語由来の語句による「音の長さ」と「音の響き」によるリズムの変化の例は、特筆すべき文体の技巧と考えられる。彼は、単に「平明で、モノシラビックな言葉からなる単文」を連続させて書き連ねるだけの作家ではないと思われる。その意味において、「洗練」された作家と言えるのではないか。

### b. 短編集 *Death in the Woods* の中の、その他の短編における例

以下の例もまた、Anderson が、いかにして「平明で、モノシラビックな言葉からなる単文」のリズムを変化させているかを示している。“The Lost Novel”という短編に見られる1つのパラグラフ全体を示す。

Such tenderness of understanding—of her difficulties and her limitations, and such a casual, brutal way of treating her, personally. “The Lost Novel”, (87[125])

この一文は、主にアングロ・サクソン語をベースとして「平明で、モノシラビックな言葉からなる単文」の例には見えない。「モノシラビックな言葉」は、such, of, and, her, a, way に限られる。むしろ、文全体としては逆にラテン語由来の、音節の多い単語をベースにして書かれたセンテンスのように見える。例えば、tenderness (3音節), understanding(4), difficulties (4), limitations (4), casual (3), brutal (2), treating (2), personally(4) など多音節の単語が目立つ。この手法によって、パラグラフ全体のリズムの流れは、前後のパラグラフとは異なるように変化させられる。

加えて、以下の例も際立った変化を示している。

...John had never thought of the obligation involved in citizenship until that moment....  
“The Fight, (99[137])

ここで注目すべきは、obligation (4音節), involved (2), citizenship (4) moment(2) というラテン語由来の単語の使用である。「モノシラビックな言葉からなる単文」の連続するリズムは、ここで大きく変化を遂げるように思われる。

#### c. *Winesburg, Ohio* における例

On the summer afternoons when Elizabeth and the doctor sat in the office and talked of their two lives they talked of other lives also. Sometimes the doctor made philosophic epigrams....“Death”, (271)

この引用例において、4行目のセンテンスの文末の“philosophic epigrams”に注目すべきである。1行目から2行目にかけてラテン語由来の単語は、doctor や office が目を引く程度で、それ以外は、Anderson のセンテンスに特徴的なアングロ・サクソン語をベースとした「平明で、モノシラビックな言葉からなる単文」のように見える。しかし、文末の“philosophic epigrams”は、どちらの語もギリシャ語由来であり、しかも、5音節+3音節

という組み合わせになっている。文末において、「モノシラビックな言葉」によるリズムは、その流れを大きく変化させられる、ように思われる。ここでも、「音の長さ」と「音の響き」とによるリズムの変化は、際立っており、また、効果的であろう。

### Ⅲ. 長いセンテンスと短いセンテンスの組み合わせによるリズムの変化

Anderson は、パラグラフの中で、長いセンテンスが連続する一方で、極端に短いセンテンスを割り込ませて、全体のリズムを変化させているように思われる。以下、“Death in the Woods”における例から見ていく。

#### a. “Death in the Woods”(1933) における例

The old woman was nothing special. She was one of the nameless ones that hardly any one knows, but she got into my thoughts. I have just suddenly now, after all these years, remembered her and what happened. It is a story. Her name was Grimes, and she lived with her husband and son in a small unpainted house on the bank of a small creek four miles from town. (4[42])

以上は、短編“Death in the Woods”冒頭の第5パラグラフ全体を示している。第1センテンスが、6words からなるセンテンスで、第2センテンスが、18words からなるセンテンス、第3センテンスが、14words からなりたっている。このパラグラフ全体のリズムの流れは、第4センテンスの“It is a story.”という、わずか4words で書かれたセンテンスが登場することによって、急にリズムは変化させられる。その変化は、第5センテンスが28words であることによってまた、さらに際立つ効果を持っているように思われる。このように見ていくと、Anderson の文体上の繊細な技巧は特筆すべきものと考えられる。

#### b. 短編集 *Death in the Woods* の中の、その他の短

## 編における例

Anderson が、1つのパラグラフの中で、比較的長いセンテンスの連続する中で、いかに短いセンテンスを組み合わせることでリズムを変化させているか、について例を下に示す。

And such a fellow is walking in the street.  
He meets a woman like my wife, an honest woman without too much experience of life.  
He smiles. A tender look comes into his eyes.  
Such deceit. Such callow nonsense.  
“There She Is—She Is Taking Her Bath”,  
(61[99])

以上のパラグラフで注目すべきは、“He smiles.” という1文である。僅か、2語からなるセンテンスである。パラグラフの第1センテンスは、9wordsで成立っており、第2センテンスは、16wordsから成立っている。これらの後に続くセンテンスとして、“He smiles.” というセンテンスが置かれ、ここで産み出される落差は、際立っており、単調になる可能性のあるリズムは、大きく変化させられている。

僅か2語からなる極端に短いセンテンスの例は、他にも見つけられる。例えば、“Like a Queen” には、次のような例を見つけることができる。

He had some sort of tool in his hand,  
a corn-cutting knife, he said. The woman  
looked at him. The horse traders looked back.  
They laughed. The corn-cutting knife dropped  
from his hand. Women must know when they  
register like that. “Like a Queen”, (113[151])

ここでも、2語からなるセンテンスである “They laughed.” の置かれる位置は、単調になる可能性のあるパラグラフの流れに変化を産み出している。

また、2語からなるセンテンスの例は、“In a Strange Town” にも見つけられる。“I dream.”

というセンテンスである。

And so I walk in such a strange place. I  
dream. I let myself have fancies. Already I  
have been out into the streets, into several  
streets of this town and I have walked  
about.... “In a Strange Town”, (150[188])

以上のような例は、Anderson が、いかに変化をつけようとしながら、センテンスを創り出そうとしているか、を具体的に示している。

## c. *Winesburg, Ohio* における例

*Winesburg, Ohio* における、長いセンテンスと短いセンテンスの組み合わせによるリズムの変化の例を示す。最初の例は、“A Man of Ideas” からの例である。この例においては、“He understood.” という1文に着目すべきである。

....George Willard began to laugh. He  
understood. As he had swept all men before  
him, so now Joe Welling was carrying the  
two men in the room off their feet with a tidal  
wave of words. “A Man of Ideas”, (119)

また、別の例を以下に示す。この例は “Respectability” からの例である。ここでは、“He pitied them.” という、僅か3wordsで成立っているセンテンスが、前後のセンテンスのリズムの流れを変化させている。

....His feeling toward men was somewhat  
different. He pitied them. “Does not every  
man let his life be managed for him by some  
bitch or another?” he asked. “Respectability”,  
(136)

最後に、“The Untold Lie” からの例を示す。前後のセンテンスに挟まれて、“Then came silence.” という、僅か3語からなるセンテンスが、効果的に、単調になりがちなパラグラフのリズムを、大きく変えているのが分かる。

....They were husking corn and occasionally something was said and they laughed. Then came silence. Ray, who was the more sensitive and always minded things more, had chapped hands and they hurt. “The Untold Lie”, (247)

以上のように、Anderson は、長いセンテンスと短いセンテンスの組み合わせによって、リズムを変化させていることが分かる。

### おわりに

以上見てきたように、Anderson は、様々な場面で、単調なリズムを変化させる手法を駆使しながら、作品を作りだしてきたことが明らかである。このような例から、Anderson の文体の「洗練」ということが言えるのではないか。

### 引用文献

Anderson, Sherwood. ed. Kichinosuke Ohashi,  
*The Complete Works of Sherwood  
Anderson*, Rinsen Book Co.,1988.

Phillips, William L. *Sherwood Anderson Winesburg,  
Ohio Text and Criticism*, ed. by John H.  
Ferres, The Viking Press, Inc., New York,  
1966.

Small, Judy Jo. *A Reader's Guide to the Short  
Stories of Sherwood Anderson*  
G.K.Hall & Co., Macmillan Publishing  
Company, New York, 1994.

金関寿夫 「現代アメリカ散文スタイルについて  
の一考察」 『人文研究』 大阪市立大  
学 1962年

西田実 『アメリカ文学史』 成美堂 1984年

(2019年3月21日に日本比較文化学会東北支部大会にて発表したものに加筆・訂正を施しました。)